

# ヘーゲルの所有論（上）

高 橋 一 行

---

## 《論文要旨》

---

ヘーゲルの所有論をまとめ、それが、ヘーゲル以前のロック、カントを受けているものであり、また後のマルクスがそのよりどころとしたものであり、さらに、現代においてその重要性を増している知的所有論をも射程に入れたものであることを分析する。

第1章では、『法哲学』が所有論から始まっていることの意義を再確認する。また、所有論が認識論と同型であることを、第2章において、まず初期ヘーゲルに探る。次いで第3章では、認識の歩みを追う『精神現象学』において、それを所有の論理として読み込むことが可能であることを確認する。第4章では、それら三つの章の結論が、すなわち所有と認識の論理が同じであることが、『論理学』の中で、最も明瞭に示されていることを確認する。そのことによって、ヘーゲルの所有論が良く知的所有まで説明することを、あるいは、知的所有論において、最もヘーゲルの論理が明快に現れていることを、最後の章で書く。

第1章は、すでに書いた論文の一節を部分的に直しただけで使っている（高橋 2005a, 第4節）。第4章もすでに書いた論文をもとにしているが、これは大幅に書き直した（高橋 2005b, 第1-3節）。他の章は、すべて新しく書いている。これらの章によって、ヘーゲル全体系の中での、所有論の位置付けが可能だろう。

キーワード：所有、知的所有、ヘーゲル、ロック、カント

---

目 次

- 1 『法哲学』の所有論
- 2 初期ヘーゲルにおける所有論
- 3 『精神現象学』の所有論 … ここまで今回
- 4 『論理学』の所有論
  - a 中項としての身体
  - b 判断論から推理論へ
  - c 推理論から理念論へ
- 5 ヘーゲルの知的所有論
  - a 知的所有の諸概念
  - b 知的所有の正当化
  - c 知的所有の諸問題

1. 『法哲学』の所有論

すでに、ロックを論じた拙稿において、まず『統治論』では、社会契約論の前提となっている所有論をまとめ、その上で、所有論と認識論との同型性を、初期ロックに探り、最後に、認識論の大著『人間知性論』に、所有の論理を確認した（高橋 2008）。同じことをここではヘーゲルにおいて、確認してみたい。

まず、『法哲学』第一部「抽象的な法」第一章「自分のものとしての所有」は以下のように三つに分かれる。

- A. 占有取得
  - i 肉体的獲得
  - ii 形造り
  - iii 標識
- B. 物件の使用
- C. 自分のものの外化、または所有の放棄

私たちはこの A,B,C の三つからそれぞれ彼の所有観を見ることができる。

- A. 主体が自然に働きかけ、それを自分のものとする。すなわち、占有取得の内、i 肉体的獲得と ii 形造りがそれに相当する。さらに、iii 標識において、社会の中でその主体の所有が認知される。
- B. その物件は使用されることで所有されている、ということが明らかになる。
- C. 物件の所有については時効があり、やがてそれは放棄される。そして所有は、放棄されることによって、あらためてそのことが認識される。

ここで注意を先に与えておけば、ヘーゲル読解においては、カテゴリーの移行が最も重要で、どのように移行するのか、その論理を追うことが大切である。第二に、ヘーゲルの論理においては、後に出てくるカテゴリーがより多く真理を担っている。このことが注意されねばならない。

以下、具体的にヘーゲルの記述に即して見て行きたい。まず『法哲学』は、意志から始まる。

「法の地盤は一般に精神的なものであり、そのもっと正確な場所と出発点は意志である。これは自由意志である。従って、自由が法の実体と規定である。法体系は実現された自由の王国であり、精神が自ら生み出した、第二の自然としての、精神の世界である」（4節。なお、以下括弧内は節を省略。）。

ロックの主体と違って、ヘーゲルは『法哲学』を論じる前に、『エンチクロペディー』で十分に主体の生成について論じている。『エンチクロペディー』の第三部は、「精神哲学」であり、それは、「主観的精神」「客観的精神」「絶対的精神」から成り立っている。この「客観的精神」が『法哲学』に相当する。つまりヘーゲルはここで、長々と「主観的精神」、つまり精神の生成を論じ、次いで、法の領域に入っていくのである。

「（自由意志が存在するが）、それは主体の、それ自身の内で個別の意志である」（34）。（なお、以下、括弧の中は筆者の解釈である。）「主体は（自己関係する）、その限りで人格である」（35）。しかし彼は単に主体であるに過

ぎず、「人格は理念として存在するためには、ある外的な、自らの自由の圏を自らに与えねばならない」(41)。このあと、物件が導入される。

「自由な精神と直接的に異なっているものが、その精神にとっても、それ自体にとっても外的なもの一般である。外的なものとは、ひとつの物件であり、不自由なものであり、非人格的で、無権利のものである」(42)。

「私が、それ自身外的な支配力の中に、あるものを持つ、ということが占有である」(45)。「人格として私は直接に個別者である。…この人格としての私は、私の生命と身体や、他の様々な物件を、それが私の意志である限りにおいてのみ、持つ」(47)。「身体は、精神の意志を持つ器官となり、生き生きとした手段となるために、まず第一に精神によって占有されねばならない」(48)。主体は精神であり、それはまず身体を所有する。それから物件の所有へと進む。

どのように物件を所有するか。まず身体的獲得(55)がある。これは要するに、自分の手で掴んだものが自分のものである、ということだ。

次いで、形造りがある。「形造りは、理念に最も似つかわしい占有である。なぜならば、それは主観的なもの(自分で立てた目的)と客観的なものとを自分の内で合一させるのだから(56注)。ここでヘーゲルは、土地の耕作、植物栽培、動物を馴化して飼育することを具体例として挙げている。この時点で、ロックの労働による所有という考え方と良く似ているということは指摘できる。さらに土地所有から始まって、議論は進み、植物、動物と、生物が所有の対象となる。このことについて、つまりヘーゲルにおいては、生物を所有することが、所有の根源に関わることについては、後の節で詳しく考察されることになる。

それから標識が来る。ここまで対自然で所有が考えられていたのに、ここで社会的に承認される、という契機が入る。「標識付けによる占有は、すべての占有の中で最も完璧である。…標識は他の人に対してのものであり、

他の人々を排除するためのものであり、私が私の物件の中に私の意志を置き入れたことを他人に示すためのものである」(58 補遺)。

さて、ここから所有の第二段階になる。物件の使用が所有の一形式であるとは、その物件が使用価値を持つ、ということである。そして物件が使用価値を持っていることは、物件を使用することによって明らかになる。同時に所有者は、物件の交換価値も所有できるようになる。「私は物件の完全な所有者であって、物件の使用についての所有者であるだけでなく、物件の価値についても所有者である」(63)。私は物件を持ち、その物件は使用価値と(交換)価値を持つ。

さらに使用と所有の関係が解明される。「使用とは、物件を変化させ、滅ばし、消費することによって、私の欲求を実現することである」(59)。「物件は私の欲求の充足の手段に貶められている」(59 補遺)。第一に、物件は使用されることによって、所有されていることが明らかになる。第二に、使用は時間の中で行われる。使用は持続的な欲求に基づいて行われる。ここから時効の概念が発生する。長い時間、物件の占有や使用をしなかった場合は、その物件は無主となる。「時効は所有の実在性という規定に基づく。つまり、ある物を持つとする意志は、その意志を外に表現すべきである、という必然性の規定に、時効は基づく」(64 注)。

さて、第三段階の定義が外化である。「私の所有は、私がその中に私の意志を置くという理由でのみ、私のものであったが、私はそれを私の外に放棄することができる」(65)。「この放棄すること、譲渡することが、一つの真の占有である」(65 補遺)。

物件を使用しないで、長い時間がたてば、時効になり、私のものではなくなるが、これは私が直接意図した結果ではない。しかし私がこの物権を私のものではない、と明言すれば、それは放棄となり、それが所有の一形式であり、しかもヘーゲルの論理によれば、それは一番お終いの形式だから、それ

こそが真の所有の形式である、というのである。これは一見逆説的であるが、しかし理解するのに難しいことではない。私は他人のものを占有したり、使用したりすることはできるが、譲渡することはできない。だから譲渡できる、というのは、その物件を私が完全に所有している証拠なのである。ヘーゲルが言いたいのは差しあたって、そういうことだ。

いくつか重要なことがある。まず、この所有の最高の形式である、譲渡から、次の契約概念が出て来る。そして契約とは、その物件を、その使用価値から離れて、社会の中における価値として見る、ということに他ならない。また契約には、少なくともふたり以上の人間がそこには必要となり、さらにその二人以上の関係を拘束する法的関係がなければならない。物件の所有者は、物権を放棄すると契約することによって、相手から、その物件の真の所有者であった、ということを認めてもらい、かつそれを法的に承認してもらう。つまり、ヘーゲ尔的に言えば、契約が所有の真理なのである。そうしてそこから、所有の論理を超えて行く。

次の二つの確認がさらに必要である。ひとつはこれらの所有の諸定義の現実的意義についてである。まず、労働と承認は、所有の発生的定義である。この二つによって、所有が正当化される。次は現実的定義である。使用することが所有の現実的な意義である。本来、人は物件を使用するために所有するのである。また使用できる限りで所有すべきであり、使用できないほどに所有してはいけないといったこともここから指摘できる。最後は、究極の定義となる。人は、自分の所有を人から認めてもらうだけでなく、他人の所有も認めねばならない。人は自分の所有であった物件を他人の所有物とすることで、その所有物がかつては自分のものだったことを他人から正式に認めてもらえ、また現在は他人の所有物であることを認める。ここに相互承認によって、法が発生することが説明される。

ここで付言すれば、発生的定義のふたつ目の承認は、自分の所有を他者か

ら認めてもらうという一方通行の承認であるのに対し、究極的定義の相互承認においては、自己と他者が相互にその所有を認め合っている。その違いは注意すべきである。

もうひとつ重要なのは、『法哲学』全編の中での所有論の位置付けである。膨大な『法哲学』の学説史の大部分は、前半の所有についてではなく、そのあとの、とりわけ人倫の議論についてである。つまり所有論の議論は案外少ない<sup>(1)</sup>。しかし、人倫は、所有を巡って自己が他者と関わり、自己も他者も所有の主体として相互に承認し合う体系にはかならない。所有論こそが、その根本にある。

ヘーゲルに即して言えば、「法（Recht）哲学」と訳されるが、むしろ「法と権利の哲学」とすべきであり、その全体の、第一部が権利であり、その最初に所有が来て、その所有が法的に権利として認められる。それが道徳を経て、人倫に至り、そこで自己と他者との相互承認の体系が完成する。そこでは所有を超えた論理で、社会的諸関係が作られる。そのような構成になっている。

しかも、この節に続けて、ヘーゲルの他の著作を読むことになるが、そこにおいても、隠れた概念として、または明示的に、所有は常に存在している。そのことを解明しよう。

## 2. 初期ヘーゲルにおける所有論

ヘーゲル『法哲学』は、所有論の論理から始まり、それが、『法哲学』全編に行きわたっていることは、前章で確認したばかりである。その所有の論理が、一般には認識の進展を示しているとされる『精神現象学』に縦横に生かされていると私は考える。そのことを次章で示す前に、この章では、初期ヘーゲルにおける論理構成を見たい。それは後の二著をつなぐだろうと考え

られる。

この二著の類似性の原型を最初に示すのは、『人倫の体系』(1802-1803)である。ここでは出発点は感情である。これは『法哲学』の出発が意志であることに対応する。「最初のポテンツは直観としての自然的人倫」(p.281)であり、その直観は、「個別的な感情に完全に沈潜したものとして存在する」(ibid)。

感情は、主体と客体の分離を前提し、その分離を克服する過程として、欲求、労働、享受が考えられる (p.282)。分離を克服したいという欲求、それを克服する労働、その結果の享受というトリアードである。そしてその労働に占有取得の根拠が求められる (p.284)。

ここにおいても最初の労働のイメージは、栄養物摂取である。つまり外的なものにまず、栄養物としての価値付与をし、主体の側の食欲という欲望と合致させる。つまり客体を主体に取り組むのだが、無差別に自然物を摂取するのではなく、主体の側の感情に従って、対象の側を限定し、その限定によって、対象を「観念的なもの」(p.283)とする。ここにヘーゲルの観念論の最初の姿が、つまり他者の自立性を否定して、自己のもとにそれを取り込み、自己の一部として含ませるということが明確に述べられている。

後の『法哲学』は、所有に始まり、所有は労働から始まり、そうしてその所有概念を克服して「人倫の体系」を作るので、このヘーゲル初期の『人倫の体系』が既に『法哲学』の論理を持ち合わせているというのは、いわば当然と言える。しかし私にとって興味深いのは、次の点である。

その労働の内、とりわけ本質的なものと考えられているのが、その対象が生物である、「生ける労働」である。植物や動物を対象とする労働は、その対象がまさに、「普遍的でかつ特殊的である」ために、労働もまた「実在的で、生ける労働」となり、その活動も、「総体性として認識されなければならない」(p.286)。そしてこの労働が「総体性である」ことによって、主体



は単に「主体であるだけでなく、同時に普遍的で」あり、そして、自らを普遍性として定立することでさらに、対象をも普遍的なものとして持つ (p. 288)。すでに述べたように、『法哲学』の所有の対象として、生物が挙げられていて、そのことがここで想起されるだけでなく、以下の節に述べるように、『精神現象学』において、主体が対象に関わる過程の中で、対象が、生物になったときに、その普遍性が議論される。そのことに注意が向けられるべきである。そしてここから、自己と他者の問題が発生する。対象がただのモノから、生物に至ったときに、主体の側は、対象の中に自己を見出し、それと同時に、自己をその他者から見た他者として認識する。対象は、ここに至って、「知性」(ibid) となり、『精神現象学』の自己意識につながる。これが、初期に始まり、ヘーゲルが生涯関わった論点である。ここではまだ相互承認論はごく初歩的なものである。つまり他者を自己とみなし、他者から自己を自己と承認してもらうのだが、それは単に、互いに相手を所有の主体とみなすだけである。所有を超えて、人間関係を作る段階は、この後のものである。

さしあたってここでは、この『人倫の体系』の議論が『精神現象学』の前半の議論と重なり合うということを指摘したい。次の章で、より詳細に『精神現象学』と『法哲学』の論理の類似性を示すが、その原型がここにある。

ここで個別的な客体は、植物、動物、知性と変化し、他の物と関わり、普遍的なものとなる。一方主体も他者との関わりの中で、普遍的なものとなる。さらに主体は「ただ単に他者との関係で普遍性であり、かつ無差別であるだけでなく、対自的に存在する定立されたもの、真に絶対的に普遍的なものではない」(ibid)。

ここで次のようなことが考えられている。主体は、労働し、生産物を作るが、自己が必要とする以上のものを作り出す。その「剰余」(p.297) という客体は、他人も使用できる普遍的なものである。一方主体も、他者との関係

にある普遍的なものである。このことによって、占有は、他者との間で、「所有」(p.298)となり、そこから権利が生じる。「所有における普遍性の抽象は、権利 (Recht) である (p.298)。ここでヘーゲルは、この権利が物という特殊態に反映されると、「価値」(p.300)が生まれると考える。ここに、個別が普遍性を帯びることで、観念的なものが成立するという機構が説明されている。そしてそれによって、価値が生じることで、つまりこれが観念的なものであるのだが、所有物は交換され得る。これをヘーゲルは、「汎通的な観念性 (die durchgängige Idealität)」(p.300)と呼ぶ。これが相互承認論の始まりである。他者の所有を認め合い、価値付けをし、ここから交換が生じ、契約が必要となり、法に至るのである。

もう一点、着目すべきことは、拙論でキーワードとなる「中項」(Mitte)の概念が、すでに明確に述べられていることである。「主体的なものであり、同時に客体的なものであるという性質を持ち、かつこの両者を媒介するもの」(p.290)として、中項は以下の三つを具体的な姿として持つ。今、労働の対象は、生物であった。生物は、両性相俟って子どもを産む。その子どもが、両性の中項となる。次に、労働には道具が必要で、その道具が主体と客体の中項となる。最後に言語は、自己意識同士の中項となる (以上、p.290-295)。この中項によって、対立する二者は結ばれ、かつそのことによって、実在する個別的なものは、観念性を帯びる。

さて本章で、もうひとつ、私の挙げたい初期ヘーゲルの著作は、『イェーナ体系構想Ⅲ』(1805-1806)の「精神哲学」(『イェーナ体系構想』所収の「精神哲学草稿Ⅱ」)である。そこにおいては、これも『法哲学』の原型をなす論理が存在し、かつ、『精神現象学』後半の所有を超えた相互承認論に至るまでの論理が、つまり『人倫の体系』より一步進んだ論理が見られる。

議論の出発点は、精神であり、それは知性と意志から成り立つ。まず知性の節は、一見すると、『精神現象学』の議論と良く重なる。そして続く意志

の節は、今度は『法哲学』の議論そのもののように思われる。

知性の節から見て行きたい。ここで考察されるのは、「精神の運動である」(p.185)とされる。精神は自己自身であり、自分自身に対立して存在する(p.186)。対象の存在は、精神の知性としての作用により、私の中にあり、私のもの(Meinung)、私の所有物である(p.188)。私は対象を印として自己内に持つ。ここで名辞が中項になる。自我は名辞を占有し、そうしてその名辞が中項となって、自我と対象とを結ぶ。自我はその対象を、さらには中項として、明治も自己自身とみなすから、この精神の運動は、自己が自己を産出する試みであり、従って、自己関係である(p.188-194)。

ここでもすでに、「労働」の概念が出現している。「自我の労働は、自分自身に対する最初の内的な働きかけであり、…精神の自由な高まりの始まりである」(p.194)。つまり『精神現象学』の精神の運動を思わせる記述が、すでに労働概念を下敷きに成立している。さらには、ここですでに、普遍と個別とを中項が推理論的に媒介するということが言われている。

しかしこの知性は自由ではあるが、その運動は、まだ内容を持たない(p.201)。そこで次の段階に進むのである。ここから意志論が始まる。

意志はまずは普遍的なものであり、目的である。次いでそれは、個別的なものであり、活動である。最後にそれは、両者を結ぶ中項であり、衝動である(p.202)。この衝動が労働を生み出し、労働によって、衝動は充足する(p.206)。

精神は対象を自己とみなす。しかしまだ物としての対象は、自己にはなり得ず、その時点ではまだ可能性にすぎない。そこで、意志が対象を自己にすべく、労働を通じて、その実現を図る。労働は物を自己とすることであるが、同時に自己は、自己でありつつ、かつ労働の産物という対象になることでもある。ここで労働は自己関係である。自己は労働によって対象化された自己と関わる。この自己関係の論理が同時に承認の論理となる。自己は対象の中

に自己を認める。それは対象という他者の中に自己を認めることになる。「他者の内に自己を直観することが各人にとっての目的である。…この二つの自我、つまり私の内なる自我と、他者の中で止揚された自我とは同一である」(p.219f.)。

論点はここではほぼ尽きていると見て良い。その後の節では、この相互承認論が深まり、契約に、さらには、法に議論が進む。

体系期の著作『エントツクロペディー』はヘーゲルの全著作を体系的に位置付けたものである。その第三篇「精神哲学」の構成は、第一部第二章が「精神現象学」で、続く第二部が「法哲学」である。従って、この『イェーナ体系構想Ⅲ』「精神哲学」の最初の節「知性」が、『精神現象学』の議論であり、続く節「意志」が『法哲学』の議論になっているということ自体は、後の体系の萌芽と見ることができて、そのこと自体は驚くべきことではない。

しかしこのヘーゲル初期の草稿群において、まず「知性」の節で、労働概念を出し、その不十分さを補うために、次の「意志」の節で、十分な労働概念を展開して、所有論を述べているということから考えられるのは、ヘーゲル初期の集大成とも言うべき『精神現象学』を、ヘーゲルの所有論として読むことが可能だし、またそうすることは、ヘーゲルの真意を汲むことでもあるということである。そのことは次の章で示される。さらに、続く第4章の各節は、『論理学』の所有論である。ここでは、この初期ヘーゲルに頻出する「中項」「推理論的連結」がキーワードとなって展開される。その前に一点指摘しておく。

ハーバーマスの主張がここで重要であろうと思われる。彼は次のように主張している。すなわち、初期ヘーゲルにおいて、労働という自己関係的な論理と、相互承認論とのふたつがともに併存して見られると言うのである。「労働と相互行為 —ヘーゲル『イェーナ精神哲学』への注—」は、その題名が示す通り、道具を用いて、自然の因果性に関わる労働の論理と、主体間

の相互行為における意思疎通の論理とが、重要な役割を示していると言う(Habermas)。この二つの論理は、どちらかから他方を導き出すことは不可能な、併存して、初期ヘーゲルにおいて、その体系構想を形作っている。しかしヘーゲルは、結局は、後の『精神現象学』において、さらには体系完成期の『法哲学』に至って、その相互承認の論理を捨て、労働という自己関係論にその論理を収斂させたとハーバーマスは考えている。そこでは、相互承認は、自己関係論のひとつのモーメントにすぎないとされるのである。

このことはマルクスにも影響を与えているとハーバーマスは考える。社会的な諸関係がすべて生産の自己運動に解消されてしまい、生産力がすべてを決定するという機械的なマルクス解釈が生まれる余地を作ったとされている。「飢餓と労苦からの解放は隷属と屈従からの解放とは必ずしも一致しない」(p.46)。

この短いヘーゲル論は、ずいぶんと多くの影響を与えた。ひとつは、今述べたように、マルクスの生産力中心主義の考えがヘーゲルに由来するという通俗的な見方を補強した。確かに、対自然の生産力が高まれば、社会の矛盾がすべて解決するだろうという素朴なマルクス主義は多く存在した。しかしそれはヘーゲルとマルクス両方の誤読に基づく。

第二に、ヘーゲルの論理が最終的に自己関係に収斂していくという考え方は、結局は、普遍意志が前提されていて、個別意志がそこに吸収されていくからだとしてハーバーマスは考えていて、それが、ヘーゲルにおいては、個人の自由は最終的には国家の中に解消され、市民社会の諸問題も国家に回収されていくという、そのようなヘーゲル観を広めた。

そして第三に、ヘーゲル研究学説史においても、このヘーゲル論が、つまり自己関係が根本だという考えが、ヘーゲル観として主流となる。一方相互承認を重んずる論は、ヘーゲル研究において、夥しい研究を生み出しており、そこには様々な議論があり、相互承認の論理はヘーゲルを理解するための根

本であり、決して自己関係の論理に収斂していく訳ではないことを、具体的にヘーゲルを読みこみ、例を挙げることで、詳細に論じるものもある。しかし、ハーバーマスの主張は、自己関係は論理の縦軸となり、一方相互承認は、横軸となって、初期ヘーゲルにおいては、愛という概念が根底にあり、その上に、両者相交わって、論理を作っていくのだが、『精神現象学』以降のヘーゲルにおいては、強引に、前者に後者が飲みこまれてしまっているとまとめることができる<sup>(2)</sup>。

この対立する二つのヘーゲル論は、ヘーゲル理解の根本にかかわるものである。私の考えでは、ハーバーマスは周到に論理を組み立てていて、緻密な論理に隙はないのだが、しかし根本的なところで間違っていると言わざるを得ない。

それは自己関係の理解に関わる。労働の論理が、そしてそれは所有の論理でもあるのだが、自己関係の論理であるということは正しい。しかし第一の間違いは、労働の論理のみが自己関係の論理であると考えてしまったことである。そのことは直ちに、以下の第二の間違いにつながっていく。

つまり第二に、ハーバーマスは、自己関係の論理が相互承認の論理と対立すると考えてしまった。しかしこの、相互承認の論理もまた自己関係の論理である。

すでに、初期ヘーゲルにおいて示されたように、そして次の節で『精神現象学』において、より詳しく確認できるが、自己は他者に出会い、そこに自己を見出す。自己は他者を自己だと思う。他者もまた自己、つまり他者の他者を他者の自己とみなす。自己と他者は相互に他者を自己とみなし、そこからさらに自己に帰って来て、自己を他者の他者とみなし、そうして相互に自己と他者は承認し合って、相互に自己を自己とみなす。ここで自己と他者は相互に承認し合って、自己を自己にするのだから、自己が自己に関係する自己関係と自己が他者から承認され、他者が自己から承認される相互承認は同

じものなのである。

もちろん、自己関係と相互承認は、常に同じものである訳ではないかもしれない。自己関係だけしかない場合もあり得よう。例えば、引き籠りは、自分の世界に自閉して、そこには自己関係しかないように思われる。しかし良く考えれば、その場合の自己は他者関係を経て成り立っているものではなく、つまりそこに実は自己はなく、他者が他者のままで自己になり得ず、他者が他者のまま、自己との関係が進展せず、そこには実は自己も他者もない。あるいは他者しかいない。そういう世界であろうと思われる。自己関係も相互承認も成り立っていないのである。

そういうことはあり得る。そういう、病的とは言わないまでも、関係の進展の過程で、途中の段階はあり得るし、またその途中の段階に意図的に留まって、そこで自己主張する場合もあり得よう。

しかし良く考えれば、相互承認があれば、そのことで自己関係が同時に成り立ち、また自己関係は、相互承認なしには成り立ち得ない。それは同義であると言うべきである。どちらかを欠き、片方だけで成立することはあり得ない。

さらにハーバーマスの第三の間違ひは、類個関係、つまり普遍と個別の関係もまた自己関係であるのだが、そのことが不当に低く位置付けられているということである。労働の論理に引き下げられてそれは理解されている。しかしそれは本稿の後の節で示されるように、相互承認を経て、しかも相互承認を支えるものである。

先の『人倫の体系』において、スタート地点の自己は感情にすぎない。『イエーナ体系構想Ⅲ』にも、自己は、抽象的な存在、つまり自発性と知性を持った、まだ自己の可能態にすぎない。その自己が他者との交わりを通じて、自己として生成していく。自己は本質的に、つまりその生成において、他者を必要としている。他者から承認されることによってのみ、自己が成立

するのだから、他者からの承認こそが自己関係を作り、また自己関係することで自己が完成し、その自己がまた他者から承認され、他者を承認していく。そうして他者もまた生成する。

『エーナ体系構想Ⅲ』と『精神現象学』に明らかなことなのだが、この相互承認と自己関係を経て、つまり個が他の個と関係し、そのことによって、個が個として生成する、まさにそのときに個に普遍性が宿るということが注目されるべきである。その仕組みがヘーゲルによって、語られている。個が個としてではなく、関係性として考えられ、しかしそのことによってまさに個が個になるときに、個はアイデアを宿すのである。そこで個は類である。かくして、第二の問題と第三の問題はつながる。

ハーバーマスまたは、それと意見を共有する研究に対する批判は、事実として、ヘーゲルの著作の中に、承認の論理が残っていることを指摘しているが、なぜ承認ということがヘーゲルにおいて、重要になるのかというところまで考察が及んでいないのではないか。それはまさに承認という関係が、類という普遍を導くからである。ハーバーマスが、承認の論理が自己関係に収斂する、といったときに、こういうことが考えられていたのならば、彼は正しかったのだが、恐らくそうではない。自他関係と自己関係が同一で、その関係が普遍を作るというヘーゲルの論理に肉薄しているとは思えないからである。また一方でその批判者たちも、ヘーゲルにおいて、承認の論理が重要であるということを指摘するのにとどまって、その意義を確認するところまで行っていないように思われる<sup>(3)</sup>。

第三の問題に関して、次のことが注意されるべきである。自己と他者が同じであるということは、全体主義的に考えられるべきではない。システム論的に考えるべきである。つまり自己と他者は同じ構造をし、かつ同じ要素を共有している。しかも互いに他を自己と同じとみなすことによって、自己を充実させている。しかし、それぞれ自己を発展させれば、それぞれに固有の



展開を遂げて、相互に影響は与えつつも、他との差異は明確になる。それぞれの個が発展する。すべてが差異をなくして、ひとつに溶け合うのではない。それぞれが個性を発揮して、なおかつ、そのことによって、それぞれが全体を自己の中に宿す。ここに類個関係の説明が要る。これは次節以降、繰り返し説明される<sup>(4)</sup>。

ここまで来れば、マルクス理解も容易になる。ヘーゲルの労働、相互承認、類個関係という三つの自己関係の論理は、マルクス理解を容易にする。マルクスの人間観が、労働の考察から始まっているのは、明らかである。そしてその労働の分析が、必然的に、現実的な社会的諸関係の分析に至らせ、さらにその矛盾の解決案を模索して、類個関係の考察に至らせている。それは決して、労働による生産力の上昇がすべてを解決するという単純なものではなく、また現実の社会的諸関係を絶対的に固定したものとも考えは考えない(高橋 2005b)。

補足的に次のことも指摘できる。『イェーナ体系草稿』では、労働は社会的なものであり、社会を作って行くという記述がみられる。「(職業への)この欲望は、共同の労働によって満足される。労働は、個別的なものとしての欲望ではなく、普遍的なものとしての欲望のために行われる。このことを労働によって獲得するものは、これを直ちに消費するのではなく、それは共同の貯蓄となって、万人がこの貯蓄で養われる」(p.212)。これはすでにヘーゲルがここにおいて、先の自己関係の論理を含んでいて、第一の労働という自己関係は、第二の他者との相互関係という自己関係を、そして第三の、類個関係という自己関係を導くということが含意されている。

この上で、『精神現象学』の読解に行く。基本的な発想はすでに出ている。それは所有論として読むことが可能であるということである。

ロックの場合にそうだったように、初期ヘーゲルにおいて、後の『法哲学』の所有論の発想と、『精神現象学』の認識の進展の議論とが、渾然と一体化

されている。まだ未分化であり、だからこそその発想が分かりやすい。後のヘーゲルにとって重要な論点が、生のまま現れている。ヘーゲル研究がそこに集中する所以である。

しかし重要なのは、体系を作ろうとするヘーゲルであり、その最初の試みである、『精神現象学』に、後の『法哲学』に見られる所有論を見出すことで、ヘーゲル全体系を理解することである。さらには体系完成期のヘーゲル、つまり『論理学』のヘーゲルの中にも、所有論を見出すこともできるようになるだろう。

### 3. 『精神現象学』の所有論

まず見通しを与えておく。『精神現象学』は次のような構成になっている。序で、議論の出発点が主体であることが確認される。これは『法哲学』が、意志から始まるのに対応する。ここで主体というのは、自らの力で自らを作って行く、動的なものである、ということである。つまり主体は、最初は抽象的なものだが、自らの力で、自らを具体的なものと進展させていくのである。このことが確認される。

そして、最初の3節で、意識という主体と客体との関係が進展する。これも所有論の、主体と物件の関係を思わせる。意識は、感覚、知覚、悟性の三段階を経る。この主体の側の進展は、同時に客体の側の進展でもあり、その関係性も進展する。

次いで、主体は、他者に出会い、そこに自己を確認する。それが自己意識である。自己意識は自らの対象も自立的であることを知る。そして欲求の対象としてあった対象もまた自己意識であることを確信して、自己は満足する。そこで自己は他者とともに生きること、共同体の中で生きることを自覚する。

さらにその共同体の一員である、つまり類たる主体は、世界を自己とみな

す。ここでの議論はここまでとする。これで充分、所有論としての『精神現象学』の読解ができる。

以上の進展の中で、ここでは以下の三点を扱う。

まず、意識の章から自己意識の章にかけて、見て行きたい。今、意識は、感覚、知覚、悟性の三段階を経るとした。またこの主体の側の進展は、同時に客体の側の進展でもあり、その関係性も進展するとした。具体的には、直接的にモノが今、ここに存在し、それを直接知り得るとする感覚としての意識、モノに性質があり、その性質を通じて、その性質の向こうにある普遍性を認識できると考える知覚としての意識と、進展する。

最後の悟性の対象は、彼岸としての本質的世界である。ここで直接的にカント批判がヘーゲルの意図するところである。最初は、カントの言うように、本質と現象は、対立しているように見える。しかし両者が対立している限り、本質は認識不可能な空虚でしかない。本質を認識しようと思えば、すでに認識されている現象を本質の中に持ち込むしかない。ヘーゲルは言う。

内なるもの、あるいは超感覚的な彼岸（つまり本質のこと）は現象から生起していて、つまり彼岸は現象から生じる。現象は彼岸を媒介している。つまり現象こそ彼岸（本質）の本質であり、実際それを充実させる内容である。超感覚的なもの（本質）は、それが真に存在しているかのように考えられた感覚的なものであり、知覚されたもの（現象）である。しかし感覚的なものと知覚されたものとの真なる姿は、現象であるということである。従って、超感覚的なものとは現象としての現象である（p.118）。

この引用文を考えたい。

ここで以前の論文で取り挙げた三項図式を再録する（高橋 2008）。これはロックについての図であるが、カントも想定されている。カントの図を先取

りする形で、ロックがこのように考えている。

心

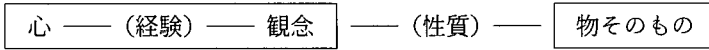


図 1

人格



図 2

ここで観念を現象と考えれば、カントの図式が得られ、それを感覚世界として、物そのものを超感覚世界と考えれば、このヘーゲルの引用文の図式が得られる。

その際に、次のように考えたい。図 1 は、直ちに図 2 と対応する。図 2 に  
 おいて、自然そのものと所有は対立しているのではない。対立していたの  
 ならば、人格は自然そのものに働きかけることができず、そこから、所有物を  
 引き出すことができない。自然そのものに働きかけようと思えば、所有物を  
 通じて、自然そのものに働きかけるしかない。そうして得られた所有物が自  
 然そのものである。ロックにおいても、ヘーゲルにおいても、最初の所有物  
 は身体である。次いで、道具が所有物である。さらに農作物においては、収  
 穫物の一部を翌年の収穫のための種として使う。かくして、自然そのものを  
 所有しようと思えば、所有物を媒介にして、自然そのものに向かっていき、  
 そこから所有をする。自然そのものの本質は所有である。三項図式の構造は、  
 ヘーゲルにおいて、よりダイナミズムを持っている。というのも、ロックに  
 おいても、カントにおいても、人格のみが、所有を通じて、生成するが、物

そのもの、自然そのものは生成しない。しかしヘーゲルにおいては、両者と、その関係が、所有という中項を通じて、併せて生成する。

さらに考えるべきは、物そのもの、自然そのものに価値があるとみなされたときに、人はそれを所有するのだが、さらに所有したものに磨きをかけて、その価値を増やそうとする。ここで対象たる所有物は、人格の力量に応じて、その形を変え、人格に対応して、その価値を現す。主客がともに進展するというのが、ここ『精神現象学』の主張である。

二番目の問題も、この引用文から考えたい。超感覚的世界と感覚世界は、対立しているのではなく、互いに反転し合う関係であった。こういう関係をヘーゲルは矛盾と呼ぶ。対象は、悟性にとって、矛盾する存在である。そしてこの自己自身に矛盾する存在は、生命となる。生命はそれ自身の中で自己運動する生ける統一体である。そして重要なことは、悟性は、その対象である生命の中に、自己を見出す。自己は対象となり、対象は自己となる。他者の中で、自己関係する意識が、自己意識である。かくして、対象に向かう意識は、自己意識となる。

こんな風に考えられないか。物をまず所有するのだが、その所有物は、自己の労働の成果であり、そこに自己が投影されている。それは自己そのものである。しかも、それを自己の所有物だと主張するためには、他者からの承認が必要である。その対象がその人のものであることを他者の中で認められる。ここで対象は、最初は必ずしも文字通り生命である必要はない。自己が投影できるものであれば、それで良い。そこにおいてまず、モノとしての対象は、先に述べた意識の三段階に合わせて、こちらも三段階を経る。そうしてその三段階目において、対象は、全体性を獲得し、生命となった。この生命の所有こそが、所有の根本ではないのか。

ロックにおいてもカントにおいても、所有の根本は土地である。それは日本のマルクス主義研究においてもそうであった。しかしロックにおいても、

最初の所有は身体であり、その身体を維持するためには、栄養物を所有せねばならず、栄養物は、微量の塩や鉄分はあるが、主として生物である。またヘーゲル『法哲学』においても、「有機的なものの形造り」(56注)として、動物の飼育や植物栽培が挙げられている。それらは順番から言えば、モノの所有、土地所有のあとに来るのだが、しかしより本質的なものになっているのではないか。それをこの『精神現象学』の順番が示していないか。

『法哲学』所有論の最初は、意志論である。所有したいと欲することが、所有論の最初であるが、食欲こそがその欲望の本質と言って良い。そして生物を所有したいと思う。生物は、たとえば植物は、自らの力で、土地や水や太陽光を活用して、成長する。それ自体全体性であり、他の客観と自ら関係を持ち、成長する。そういった、価値を自ら増やす全体性を所有することこそ、所有の真理である。そうして結論を先に言えば、所有論はここまでである。

さて、三番目の問題を見るためには、ここからさらに先に進まねばならない。自己意識は次のようなものとなる。つまり自己は、他者関係の中で生きていることを意識することで、類として生きていることを自覚する。そうして自己意識は、自己の欲求の対象を、他の自己意識に求める。「自己意識が満足を得るのは、他の自己意識においてのみである」(p.144)。

ここで自己意識は、所有の主体であり、かつ対象である。

そうして、実は所有の本質は、他者の所有である、ということが重要だ。他者を所有したいと思うところから社会は出発するのではないか。その所有をどう克服するのかということが、ヘーゲルの社会哲学を作っている。

他者の所有とはどういうことか。例えば、奴隷を考えることもできる。また現代の様々な権力関係や雇用関係で、支配、被支配ということを考えることもできる。愛する人を所有したいという気持ちもあるかもしれない。こういったことが真っ先に考えられるだろう。しかし私が考えているのはそうい

うことではない。それらは人間関係の疎外態としてはあり得る。人格をモノとして扱えば、そのような所有は可能だ。しかし今までの文脈で考えたときに、人格の所有と言うのはそのようなことを意味していない。

モノを所有し、生物を所有する。その上で、対象が人格に移る。そうした時に、対象との関係は、すでに所有を超えている。他者の中にこそ、真に自己を見出せる。その関係はもはや所有ではなく、自己意識と自己意識の関係で、互いに相手に自己を見出し、相手から自己であることを承認し合う関係である。それを他者の所有と呼び、しかしそう呼んだ瞬間に、それはもう所有の関係ではない。

人は他者を所有したいと思うかもしれない。その欲望から、所有論は始まる。しかし他者の所有はできず、むしろ他者こそが、自己の所有を認めてくれるものであり、人を自由にするものであり、今度はその他者との相互承認が社会を作る。そのように進むことを、このあとの第4章の「推理論」の中の「他者論」として書くのだけれども、ここでも繰り返す必要がある。

そしてまた、次のことも指摘したい。つまり生物の所有において、すでに垣間見えていることは、生物は、完全には所有できず、つまり生命である限り、それは自立していて、完全な使用が困難であること、そうしてそこから所有の限界が現れていることである。言うまでもなく、他者において、そのことはより顕著になる。他者は制御できず、自己を超えて行く。その認識から人は所有を超えて行くのである。

以下のようにまとめることができる。まずモノの所有から始める。しかしそもそもモノにも生物的な側面がある。そこに人格が投影される、そういうモノもある。それが最初の段階である。次に、食べモノとしての生物が来る。これはモノとして消費される。しかしここでこの対象が生物であることが重要である。さらに、人格が投影できる生物、例えばペットなどを考えよう。これは自立している。主体が必ずしも思うようには扱えない。そうして最後

に自己意識を持った人格が来る。この四段階で考えると、整理がつく。

そしてこの最後の自己意識という対象も、次のように考えるべきである。まずひとつは、所有の対象は他者であり、その他者が自己意識であることが分かって、主体としての自己も自己意識となる。それと同時に、所有の対象は自己自身である。だからこそ、所有の主体は自己意識なのである。言い換えれば、まず、主体は他者の中に自己を見出し、それは同時に、自己の中に他者を見出すということに他ならない。

以下、引用をすることで、この章のまとめとしたい。

しかし自己意識の現象（対象）とその真理（対象を持った自己意識）との対立の本質は、その真理、つまり自己意識の自己自身との一体性であり、それが自己意識の本質でなければならない。すなわち自己意識は欲望一般である（p.139）。

この欲望とは、栄養摂取がイメージされている。それは所有でもある。次のようにも言い換えられている。

すなわち食い尽くされるものが本質である。この普遍者の犠牲の上で自己保存を図り、自己自身との一体性を維持しようとする個体は、そうすることによって、その他者との対立を止揚する（p.141）。

この単一の自我が類である。…自己意識が自己自身を確信するのは、自己意識に対して、自立した生命として現れる他者を止揚することによってでしかない。つまり自己意識は欲望である（p.143）。

この欲望が満足されるとき、自己意識はその対象が自立的なものであるこ



とを経験する。…しかし同時に、自己意識は、絶対的に独立したものであり、このことは対象を止揚することによってのみ、そうである。…対象が本来的に否定であり、その自己否定の中で、同時に自立的であるとき、その対象は意識である。…否定が絶対的なものとしてある、この普遍的な自立した自然は、類そのものであり、自己意識として類である。自己意識が満足を得るのは、他の自己意識においてのみである (p.143f.)。

さて以下、第4章では、『論理学』の判断論と推理論との関係を主として扱う。そのために概念論と判断論との関係から始めて、推理論に踏み込んで行く。所有論は判断論の議論であるが、それをどう越えるかがここで議論される。もうひとつ、これらの議論は類個関係の議論でもある。それについても、詳述しなければならない。イデアの臨在がここに関わる。概念の自己分割の議論がなされ、類と個の関係が論じられる。

このことを確認することが重要なのは、その次の第5章の議論に関わるからだ。本章では、『精神現象学』において、所有の対象が、モノから生物へ、そして他者へと進展したが、生物は情報であり、知的財産は自己意識の産物であって、所有の進展の必然性、すなわち、モノの所有から、知的所有への進展の必然性が、すでに論じられていた。この知的所有の問題が、第5章の課題である。本章で示唆されていた、知的所有の問題を論理的に論じるために、『論理学』の章が、その前に必要となる。

《注》

- (1) 加藤尚武の論考は、その数少ない例外である(加藤)。
- (2) 相互承認論の研究の代表的なものとして、(高田 1994)、(高田 1997)、(滝口 2007a)を挙げる。また、滝口清栄は、ハーバーマスと意見を共有するものとして、(Siep)を挙げ、それを批判する(滝口同書)、(滝口 2007b)。
- (3) 熊野純彦は、以上の点について、最も鋭い指摘をしている。彼はこの自己関係論から、他者を導出し、他者論を展開する(熊野 2002)、(熊野 2003)。

- (4) 私の書いた二つのヘーゲル論は、関連している（高橋 2001, 第 4 章と 5 章）。またそこでは私は、ヘーゲルの論理の根本を自己関係としているが、ハーバーマスが否定的に、そこに相互承認がなくなってしまったと言うのとは違って、当然相互承認が生かされていると考えている点で、まったく異なる。このことは本稿第 5 章で論じられる。なお、同書、第 3 章ではフィヒテについて論じている。ここで、自己から他者を導出する議論に関わっている。同様の指摘は、高田純にもある（高田 1997）。